

鳥居本宿

峠の名所があった

旅人も重宝した名産品



▲おもむきのある 道中合羽の看板

板橋（東京都）から守山までの中山道67宿の63番目の宿場が鳥居本宿です。当時の景観は、現在と大きく異なっており、内湖が山田神社（宮田町）付近まで迫っていた。湖岸と山々に挟まれた狭長な土地でした。中世以前東山道の段階では、宿場は鳥居本ではなく、そこから少し南下した位置にある小野に置かれていました。井伊家2代当主の井伊直孝が、佐和山の尾根の堀切を利用して切り通しを開削し、中山道から彦根城下に彦根道（切り通し道）を引き込んだ際に鳥居本に宿場を新設したとされています。一方、幕府が設立を命じたという説もあり、その設置の経緯は、実はよく分かっていません。彦根道が分岐する位置には、現在も道標が建っていて、往時に人々が行き交った街道の面影を見ることが出来ます。



▲在りし日の望湖堂

1つ北の62番目の宿場「番場」へ行くには、摺針峠を越えねばなりません。摺針峠は、弘法大師にゆかりのある場所です。若かりし日の弘法大師がこの地を通りかかった際、一人の老婆が斧を懸命に研いでいる姿を目にします。斧を研いで針にすることが目的であると思いき、己の志が足りないと思ひ、さらに学業に励むという話が残っています。また、この峠から琵琶湖の眺望がすばらしく、旅人に「するは餅」をもてなす茶屋が建っていました。その名も「望湖堂」です。この望湖堂は本陣ほどの立派な建物で、本陣まがいの営業を営むよう近隣の宿場から抗議されるほどでした。（望湖堂は平成3年に焼失し、現在は残っていません）

宿場ならではの名産品として、腹痛や下痢止めの妙薬で、300年以上の歴史を誇る赤玉神教丸があります。これは、薬の調合が多賀大社の神教（お告げ）によるというもので、富山の薬売りに代表されるような配置売り（行商形式の売り方）をせず、出店も大津のみでしたので、多賀の神教と効能の噂を聞きつけた旅人がこそって買い求めました。『近江名所図説』にもそのにぎわっている様子が描かれています。

この赤玉神教丸を販売した店は、現在も製薬会社として存続しており、その重厚なたたずまいで宿場の歴史と景観を想像させてくれます。昨年には建物と庭園が滋賀県指定文化財に指定されました。

もう一つの名産品は、道中合羽です。これは、和紙にベンガラ（鉄さび）を混ぜた柿渋を塗りつけて防水性、保温性を高めたもので、雨の多い木曾路や北陸へ向かう旅人の間で人気の商品でした。



▲滋賀県指定文化財の建物

まちに自信と誇りを

鳥居本お宝発見隊 代表 石川 清和さん（鳥居本町）



鳥居本お宝発見隊は、鳥居本の「お宝」を掘り起こしながら、まちに住む人が楽しく暮らしやすいまちづくりを目指して活動をしています。「とりいもと宿場まつり」を開催することで、地域の人々がまちに関心を持ってもらい、鳥居本は素晴らしいところだと自信を持つきっかけになればと思います。

「まつり」をすることで、地域の皆さんとまちづくりについて意見を言う場が持てたことが良かったですね。ほかの地域でもまちを活性化するために活動をしているので、自分たちもがんばらないと、という思いが湧いてきました。

ゆくゆくは、古民家などの既存の建物を改修して、旅人の休憩所とか、まちづくりの拠点を作りたいですね。

高宮宿



▲大きさに圧倒される 多賀大社一の鳥居

鳥居本宿の次、犬上川の手前に64番目の宿場である高宮宿があります。高宮宿は、中山道筋では本庄宿（埼玉県）に次いで2番目に大きな宿場でした。

宿場の中央に立つ滋賀県指定文化財の多賀大社一の鳥居からは、多賀大社へ通じる多賀道（高宮道）が分岐します。多賀大社一の鳥居は、高さ11mで柱間が8m、柱の直径が約1.2mあります。寛永12年（1665）に老朽化した木製の鳥居に代わって立てられたもので、古式明神型としては県下最大のものでした。

この高宮の地には中世から市が立ち、すでに町場として成立していました。慶長7年（1602）に中山道の宿駅として幕府から公認されました。大名や公家などが宿泊する本陣が1軒、脇本陣が2

軒置かれており、建物は、現在失われていますが、本陣跡に残る門にその名残りを認めることができます。

通行料無料の橋

宿場の西端を流れる犬上川に架かる橋のたもとに「むちんばし」の標石が建てられています。



▲「むちんばし」の標石

この場所に架かっていた橋の名前で、それまで幕府役人が通行する時だけ架けられた仮設の橋梁が、天保年間に高宮宿の有志によって無料で一般行人に開放されました。これは通行人を助けるためだけでなく、川を渡る手助けをする川越人足の供出を余儀なくされる近隣の村々を助ける意味合いもあったようです。

かすりが美しい麻布

また、「高宮布」が名産品として、室町時代から生産されていました。江戸時代は彦根藩に守られて盛んに生産されるようになりました。正徳2年（1712）に書かれた『和漢三才図説』には、晒している麻布を生平といい、浅葱色で織

密である高宮のものが上物であると書かれています。板締餅と呼ばれる餅模様のものも後に生産されるようになり、江戸期には上物の麻布として全国的に有名な特産品でした。

豪族の面影をのこす

高宮宿には、由緒のある寺院も多く、時宗の高宮寺もそのひとつです。

中世における在地の豪族（土豪）であった高宮氏の菩提寺であったと伝えられる寺院です。境内の墓地には高宮氏の墓所があり中世にさかのぼる墓石が並んでいます。高宮氏は、櫛氏系の「北殿」と、六角氏の一族から始まる「南殿」の2系統があります。「南殿」の高宮氏は、佐和山城の南の押さえの役割を担っていました。

学生と地域の場に

滋賀県立大学4回生 三橋 恵さん（京都市）



高宮町の蔵のある商家を改修して喫茶店をオープン

しています。改修は、仲間といっしょに夏休みの1か月で仕上げました。空間デザインの勉強をしています。現場には始めてでした。大工さんに教えてもらったり、連絡調整に走ったりしました。

高宮町の魅力を知らない人がたくさんいるので、もったいないですね。この場所が学生と地域の人のコミュニケーションの場となればと思います。今後イベントや展示、ワークショップなどをしていきたいです。